

小田原史談

第189号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内(24)0637

史跡 小田原城跡

馬屋・大腰掛範圍確認調査について

大島 慎一

馬屋・大腰掛跡の調査については『小田原史談』第一八四号でもご紹介いたしました。昨年八月にこれに継続する二回目の調査が行われましたので、そのときの様子をお知らせします。

まず、第一八四号でも触れましたとおり、平成十二年度の調査では馬屋の跡と見事な井戸が確認されました。しかし大腰掛の跡ははっきりさせることはできませんでした。これを受けて、平成十三年度は馬屋の建物の範圍をはっきりとらせること、大腰掛の遺構を確認することをおもな目的とする範圍確認調査を実施する運びとなったものです。調査は七月二十三日から開始されました。まず最初のトレンチは馬屋跡の東の端を見つけることにしました。これを第一ト

レンチと呼びます。馬屋跡がどれくらい深いさによつてどのような状態で埋もれているのかは昨年度の調査で分かっていますので、今回はずいぶんと気が楽です。宮内庁図という正確な図が残されているので、これを参考に土塀の曲り角からの距離を測り、見当をつけます。土塀の曲がり角は昨年度井戸が見つかったトレンチでそれらしい部分が見つかっていますので、そのデータが役に立ちます。早速深さ六〇cm位で礎石らしいものが見えてきたため、トレンチを東に掘り進めたところ、わずか半日足らずで馬屋の東縁の石列を見つけてしまいました。余勢をかって東の縁の石列を南北方向に追跡し、一、二日のうちに東縁全体を掘り上げてしまったのです。

昨年の成果に助けられたとは言え、予想をはるかに上回る「大戦果」です。しかし好事魔多しの例えあり。その勢いで馬屋跡の西縁を確認する第二トレンチの調査に挑んだのですが、そこでは何の痕跡も見つからないのです。馬屋跡は宮内庁図によれば長さ二十一間、つまり約三十八mですから、第一トレンチで見つかった東の縁からその分西に延長したところに同じように西縁の石列があるはず。その場所は二の丸観光案内所の場所ほど正面。そこに第二トレンチを設定したのでした。

しかしそこでは曲輪を造成したときの盛土と畑の畝のような溝が数条見つかっただけでした。第一トレンチとのあまりの違い



第1トレンチ(北から)馬屋の東縁の部分。内側の石列の上に馬屋の壁が立つ。外側の石列は馬屋の基壇のもの。

に動揺を隠せず、もしかしたらもう少し下にあるのではないかと、あるいはもう少しトレンチを南に広げれば馬屋の遺構が見つかるのではないかとも思ったりしました。念のためトレンチの範圍を少し広げたり、部分的に深く掘り下げたりしましたが、残念ながら手がかりは何も得られませんでした。ただ、深く掘り下げた部分で、大きな石が組まれているような遺構に突き当たりました。狭い範圍です。何の遺構なのかは分からないのですが、個人的には井戸を外側から掘っているような感じがしました。しかもこの遺構は土層の堆積状況から見て稲葉時代より以前、つまり前期大久保時代か、もしかすると後北条時



第1トレンチ(南から)馬屋の東縁の部分が確認された

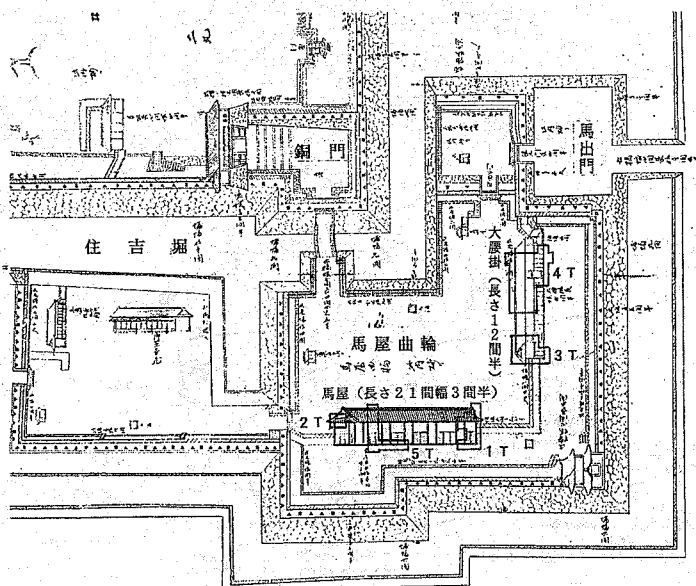
代のもののようにです。肝心のものが見つからず、意外なものが発見されたわけです。
 続く第三トレンチは、大腰掛を探すためのものです。場所は、大腰掛の南の端をとらえるため昨年度の第三トレンチの南側に設定しました。と言うのは、昨年の第三トレンチでは建物の跡がよく分からなかったため、建物の縁の部分なら建物の内側と外側の違いを見分けやすいのではないかと考えたからです。一方大腰掛の北側の縁では公衆便所が建っている位置にかかってしまうおそれがあったからです。

さて実際に発掘してみると、昨年度の第三トレンチとまったく似通った状況であることが分かりました。つまり南北に走る

一条の溝のほかは礎石が一つと礎石が抜取られたような跡が四箇所で見つかっただけでした。これは浅く掘りくぼめた穴の中に根石と呼ばれるこぶし大の石がいくつか詰めこまれているもので、礎石の下はそのようにしてつらえてあることが多いのです。ただ南北に走る溝は昨年の第二トレンチで見つかった土塀が折れ曲がると想定される位置にまっすぐ向かっており、宮内庁図にある土塀の跡である可能性が高まってきました。とすると絵図の表現から溝の東側にはやはり大腰掛の遺構があるはずなのですが、トレンチの中をいくらか目を凝らしてみてもまるで見当が付きません。宮内庁図から推定すると、一つだけ見つかった礎石か、その南側の礎石の抜き取り跡付近が大腰掛の南の縁にあたるはずなのですが、これだけではそうとは言いきれませぬ。第三トレンチで大腰掛の南端を確認できれば、宮内庁図を参考にそこから北に十二間半(約二十三m)延長したところに第四トレンチを設定して大腰掛の北側を見つける予定だったのですが、第二トレンチのこともあって本当に大腰掛を見つけることができるかどうかすっきり自信がなくなってしまうまま

では大腰掛部分をどのように整備したらよいか検討することができません。諦めの気持ちが強くなる一方、とにかく掘ってみないと、と気を取りなおして公衆便所南側の第四トレンチの調査に着手しました。

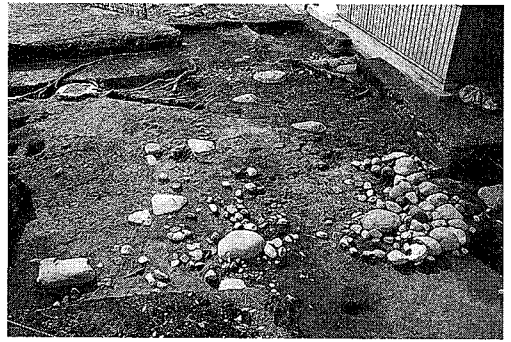
公衆便所の脇には明治時代の写真でもその見事な枝振りが確認できる大きな松が聳えています。その根元から松の根をいためないように掘り下げ始めました。するとまもなくわずか二〇cmばかりのところ幅が五〇cm前後もあるいくつかの立派な礎



宮内庁図に描かれた馬屋曲輪

1T~5Tはトレンチの略称で、調査を行った場所を示す。

石が見つかり始めたのです。さらに二〇cm近く掘り下げると、馬屋跡で確認された時と同様に真赤な焼土が一面に広がっているではありませんか。しかも第三トレンチと同じ溝が確認されたばかりでなく、その一番北の端では石列が残っている部分まで見つけられました。一気に謎が解け始めました。やはり溝跡は宮内庁図に描かれた土塀の跡だったのです。そして第四トレンチの礎石こそ真正銘大腰掛のものである可能性が高まってきました。しかし調査は予定の



第4トレンチ(東から)大腰掛の礎石が発見された

半ばに近づいています。そしてこのままでは馬屋も大腰掛もどこまで建物の跡が残っている、どこから確認できなくなってしまうのか分からないままです。そこで神奈川県教育委員会を通じ、文化庁に連絡を取り、これから調査をどう進めたらよいか相談することにしました。その結果、予定よりも調査の範囲を広げて、馬屋や大腰掛の跡がどの範囲まで残されているかを確認することになったのです。馬屋跡の方は第一トレンチと第二トレンチの中間、二の丸観光案内所のすぐ東側に第五トレンチを新たに設定して馬屋の跡を探すことにしました。一方大腰掛跡の方は第四トレンチを南に大きく拡大して大腰掛の跡がどこまで残されているのか確認

することにしました。こうなると発掘調査を一人で進めるには手に余ります。そこでとなりの係の文化財担当から同じ埋蔵文化財が専門のY氏とS氏の応援をお願いすることになりました。さて体制も新たに調査は進みます。第五トレンチも馬屋跡の石列は見つかりませんでした。馬屋を囲んで敷かれていた砂利は残されており、建物の中央付近では礎石の抜き跡も確認されました。そこでどこまで石列が残されているのか確認するために今度は第五トレンチの南端部分から東に向かってトレンチを延長しました。この位置は馬屋跡の南の石列が並んでいるはずの場所です。そしてトレンチを一〇m近く延長したところでやっと石列が残されている部分にたどり着きました。一方の第四トレンチでは、昨年度の第三トレンチに接続するまで長さ約一〇m、幅約五mにわたって南に大きく調査区が拡張されましたが、焼土や礎石はほとんど途絶えてしまうことが分かりました。また第四トレンチ北側の拡張区でも公衆便所付近から遺跡が荒されてしまっており、大腰掛の北縁を確定することはできませんでした。以上のように平成十三年度の範囲確認調査は波瀾に富む展開を見せ

つつ終了し、九月初旬には元通りに埋め戻されました。以上、調査中の紆余曲折を長々と御紹介してきました。絵図さえ残っていればそれを発掘調査で確認するのは簡単だ、と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、実際の調査ではそれほど思うようにはいかないことはこれまで見てきたとおりです。そこで調査中の一喜一憂をこの記事を読んでくださる皆様にもお伝えできたらと思います。さて最後にこれまでの調査の成果をまとめそろそろ締めくくりたいと思います。馬屋跡はその東半分はよく残されていて、建物の壁が立つ部分に石列が並び、その少し外側を馬屋の基壇の石列がめぐっていました。また建物の中央付近で棟の方向に沿って幅六〇cmもある大きな礎石の列が見つかりました。これらは焼土や焼けた瓦の破片に覆われており、いろいろな状況から見て元禄十六年(一七三三)の大地震により焼け落ちたものではないかと考えられます。その後馬屋が建て替えられたかどうか、詳しいことは分かりませんが、火事の後で掘られた柱穴もあるようですので、何か建物が建てられていたのかも知れません。なお馬屋の北東隅

の部分から鑲付の「座」や「小鉤」など銅製の金具類が多数出土しています。これらは甲冑や馬具などに使われたものと考えられることから、出土した場所にはそれらを備え置く部屋があつたのかもしれない。一方の大腰掛も直径五〇cmほどの立派な礎石を用いた建物で、絵図では不明であつた建物の幅が約五mであつたことがわかりました。また礎石が焼土に覆われていたことから、馬屋と同様元禄大地震で焼け落ちてしまったものと思われます。しかし大腰掛跡が残されていた部分は北側約四分の一ほどに過ぎませんでした。このように平成十三年度の調査では、宮内庁図に描かれた馬屋と大腰掛の範囲をほぼ確認することができましたが、遺構の残り具合が期待していたよりもよくありませんでした。また、江戸時代末期にはどうなっていたのかも引き続き検討する必要があります。しかしこれらの遺構は「馬屋曲輪」の名前の由来となつた建物の跡ですから、今後これらの貴重な遺構をどのようにしていったらよいのか十分検討していきたいと思っております。

おしま・しんいち
小田原市教育委員会 文化財保護課

小田原の郷土史再発見

「小田原用水の復元」では、小田原の歴史が曲げられ、北条氏の業績が抹消されてしまう！

石井 啓文ひろ ふみ

今年一月一日付の神奈川新聞に「小田原用水の復元」という記事が掲載されました。それには、「日本最古の水道」はもとより、小田原北条氏の業績であることも記されています。

私は、昨年の本史談三月・七月号で、これは「早川上水」とするべきではないかと提案、当市へも提言を試み、「小田原用水」では表題のような心配がある旨を再三指摘してきました。その心配が現実を示されたわけ

です。そして、十月号で昔から「小田原用水」であるという地元宮前町の方の見解も掲載しましたが、これを読まれた方からご意見が寄せられました。

「この方は「用水」を小田原方言と言われていますが、それはおかしい。終戦後は、早川上水はその水道としての役目を終え、文字通り「用水」となっていたのです。貴方が史料で示されたように小田原用水↓早川上水↓小田原水道と呼称変化してきて、近代水

道が敷設されてからは再び「用水」と呼ばれていたのです。地元の人たちは自分が育ったときの言葉で「用水」と言っているのです。こうした歴史を考えれば、「早川上水」という呼び名が最もふさわしいと思います」

私は、先日改めて板橋見附の光円寺を出発点に清流を遡って、お塔坂下の上水取入口まで歩いてきました。その際、地元の人から、昔からこの流れは「用水」と言っていたが、「上水」とすべき意見もあり、取入口の説明板は両方の意見を入れての文章になったことを聞かされました。

風土記には開渠であった板橋村では「小田原用水」と記され、延絵図の下流には水車も描かれており、一貫して「用水」であることは承知しております。しかし、小田原宿へ入ってからは暗渠となり、「早川上水」と命名され、一般的には「水道」と呼ばれています。それは、本町の御用留や日記・紀行文等に元禄時代以降全て「水道」と記さ

れていることから知れます。

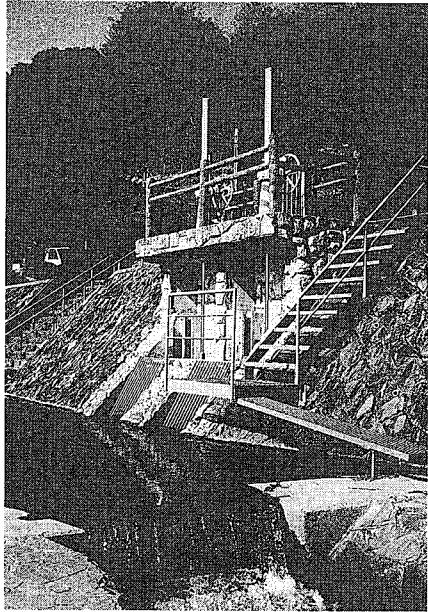
各宿場の参勤交代大名の宿泊数を調べ、小田原宿が日本一であることを立証すべく研究されている方、また、小田原俳壇の隆盛を調べている人たちは、酒匂川の川留等で当地に長逗留する文人墨客も多く、江戸文化は最も早く小田原に伝わったと言われます。江戸で上水・水道の言葉が生まれると、直ちに小田原にも伝わり、同様に上水・水道と呼ばれたことは容易に推定できます。

宮前町の人たちは、板橋村で「用水」と呼ばれていたことと、近代水道敷設後の水道の役目を終えての「用水」を混同し、昔から「用水」であったと思いついでいるのではないのでしょうか。昨夏、私は歴史研究会の仲間と南町の七十五才になられる方に昔話をお伺いしたところ、早川上水や小田原用水という固有名詞はもとより、「用水」が飲料水に用いられていたこともご存じではありませんでした。彼の生まれ育った頃、家には既に堀抜き井戸が二つもあり、用水の清掃日には魚を手掴みで取ることが何よりの楽しみであったと言われます。

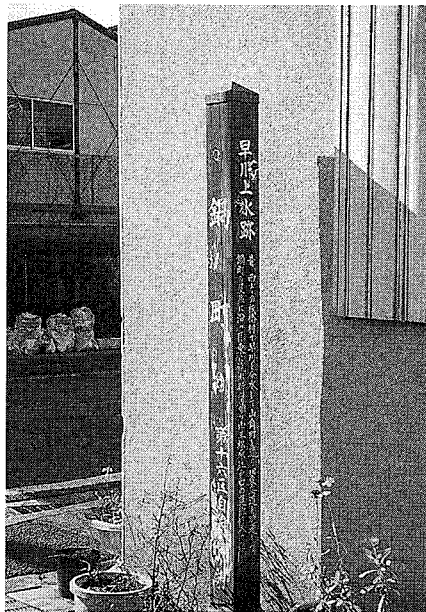
小田原の近代水道敷設は明治二十四年に議決されますが、いざとなると設置反対の声に、完

成するのは昭和十一年と大幅な遅れとなりました。当時、コレラが流行し、井戸掘技術の進歩に伴い、自衛手段としての井戸設置が急増し、近代水道敷設以前(大正・昭和初期)に「早川上水」は、水道としての役目を終え「用水」と呼ばれていたものと推定できます。取入口の説明板は、「その後、上水道から(用水路を経て)下水道と姿をかえ」とも記しています。

新聞記事によると、当市は、「小田原用水プロジェクト」なるものを立ち上げ、本格的に小田原用水を復元するという。本格的(?)小田原用水とは何を言っているのでしょうか。小田原宿内の「早川上水」は、江戸時代は暗渠となり、東海道分間延絵図(文化四年)の現南町一帯は埋樋が描かれ、嘉永(六年)大地震の記録は「埋樋掛樋七十七ヶ所内三十九ヶ所崩落」を記しています。昭和四十九年には栄町一丁目からも木管(木樋)が発掘されました。小田原宿内は埋樋が縦横に張り巡らされていたのです。萩や津和野その他の地域に見られる「用水」とは全く異なり、木管と鉄管との相違こそあれ、水道そのものであったのです。「用水の復元」では、全く歴史がねじ曲げられると言っても過言ではないでしょう。



お塔坂下、早川上水取入口



古新宿(現浜町4丁目)の木柱碑

観光施設として「せせらぎ」を復元することに私は異を唱えるつもりはありません。しかし、これを風土記が記す「早川上水」として「日本最古の水道」で、小田原北条氏の素晴らしい事蹟であることが知らされなければ、市民として断固反対せざるを得ません。

川上水跡」の木柱碑も建てられています。今も早川の上水取入口は、昔の姿を偲ばせています。そこに立つと、五・六十以上の本瀬との分水地点は高い方に水が流れているような錯覚さえ感じさせられます。この清流を辿り、東海道をくぐり、光円寺で再度地下に吸い込まれていく様子の子供たちに見せれば、私たち祖先の素晴らしい事蹟を教えることが出来る。また、用水・上水・水道の言葉の勉強にもなる生きた教材と言えます。

これまで、こうした素晴らしい遺産が余り注目されていないことに驚かされますが、この際、市民に再確認していただき、誇りにしたく念願しております。

右の文章は、お塔坂下上水取水口の説明板です。この文章では、「小田原用水」と「小田原古水道」が別にあるようにも受け取れます。故中野敬次郎氏は、「小田原古用水」「小田原水道」と時代に応じて使いわけています。私は、同氏の言葉使いが正確だと思います。

最後に、私が「早川上水」に拘わるのは「井戸と水道の話」。「日本の上水」という本で、「小田原早川上水」を「日本最古の水道」と記しながら、飲料水が主ではなく堀に引水するのが目的であるとして、日本最初の飲用を主とした水道は、「神田上水」であるとしているからです。現に、飯泉の取水堰では神田上水が日本最初の水道であるという資料が、見学者に配られていることを私の講演を聞いた女性から知らされました。これに反論するには、「小田原用水」では飲料水が主目的であったとは言いがたいからです。

先人の時代に応じた正確な言葉使いを学び、正しい歴史を伝えようではありませんか。

小田原用水取入口
小田原用水は、この地で早川の水を取り入れ、板橋村は街道(旧東海道)の人家の北側を通し、板橋見付から旧東海道を東に流れ、新宿町を通り江戸口見付門外蓮池に流れた。小田原古水道は後北条氏時代に作られ、小田原城下御府内町々に引き分けて飲用に供したものである。後北条氏の事業として、このような大規模の水道施設工事がなされたことに日本の水道施設の中では、最も古い施設の中に入ると思われ、日本の土木史の一頁に大きな事蹟として残っている。その後、上水道から下水道と姿をかえ、昭和三十一年市内電車撤去による同道大改修によってさらに形は変わったが、今日なお用水は残っている。

早川上水取入口説明板

花の「ハナノキ」と 小田原北条時代の「花ノ木町」について

額田好男

花の「ハナノキ」について。

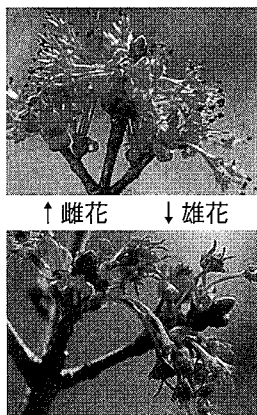
ハナノキは、カエデ科の落葉樹木で、日本名は、ハナノキ(花之木)、ハナカエデ、アカバナカエデ等。

昨年十一月八日、九日の史跡めぐり足助、明智、岩村への旅の折、宿泊の塩吹館主人に、「この辺りは紅葉が素晴らしいですね、何か珍しい紅葉がないでしょうか」と尋ねた。実は途中の香風溪の紅葉が季節的に少し早かったことが印象にあったためである。

この辺りにはハナノキという浅く三裂した葉で、それは本当に素晴らしく、もみじ以上の紅葉が自生していると紹介された。私は、思わず「ご主人、小田原には江戸時代前の小田原北条時代に「花ノ木」という町名があつたんですよ、何か関係があるのではないかな」と独り言を云いながら俄然興味が湧いてきた。そして、次の見学地、明智町、岩村町では、あちらこちらに、まさに目を見張らせるハナノキの紅葉が、公園や街路樹として植栽されているではないか、私は初めて見たこの素晴らしい紅葉が目につき、そして、小田原の「花ノ木町」の事が気になった。

樹高は二五米にもなる。雌雄異株で花は春、葉より早く、二年枝の葉腋に、束状の花序に紅色の花弁をつける。そして、その後開く新葉は赤味を帯びてみずみずしい美しさがある。このような花と新葉の美しさからハナノキという和名がついたと云われている。葉は長さ四〜七厘の広卵形で、浅く三裂し、縁には重鋸歯がある。

ハナノキ 雌雄異株



ない。

自生分布は限られていて、愛知県、岐阜県、長野県、山梨県、滋賀県であり、岐阜県中津川市千旦林(中洗井)の自生約三〇株が大正九年(二五〇)日本初の国の天然記念物に指定されている。また、愛知県の県木、岐阜県山岡町の町木でもある。岐阜県内を通過する国道三六三号線の明智町と中津川市間は花ノ木街道の別稱がある。

小田原北条時代の「花ノ木町」の名の由来について

現浜町二丁目蓮上院寺地、及び、当時その周辺の武家地付近が「花ノ木町」と云われていた。蓮上院も花ノ木蓮上寺と山号に花ノ木がついている。この寺は建長六年(二五五)建立、眞言宗、證智院と稱したが、後に花ノ木山満願寺、そして現在の寺名となった。寺の付近に、小田原北条時代に築いた総構の土塁の外れに当たる木戸がある。「鼻の木戸」と云った。その意からか「小田原衆所領役帳」に記載されている後北条の家臣に、所領高七百八十七貫余の「花之木」という名があるが、その屋敷等があつたという記録はない。なお、この辺に「ハナノキ」があつたという記録もない。ただし、『新編相模国風土記稿』は「花

ノ木」について、次のように記す。

大工町蓮上院の所在を花ノ木と唱へ山号にも稱す。今按ずるに北条役帳に花ノ木隠居、或いは花之木など見ゆ、蓋當所に住せし人なるべし。

とある。また、『東海道分間延絵図』(二七九、二八〇)に「花ノ木横町」の名があるが、東海道路筋の新宿町から北西方向に入り、蓮上院に至る道路沿の横町であり、このことも『新編相模国風土記稿』にある。私は思うに、この辺りは古くより寺院が多く、よって「シキミ」(香りの強い墓前に供える佛花)の木が多かつたのでは。「シキミ」は別名「ハナノキ」とも云われている。

以上、町の名の由来については私には解明出来ませんでしたが。会員各位のご賢察を得たい。

なお、この寄稿に当たり、岐阜県中津川市商工観光課、及び、当会会員立木繁氏から資料のご提供を頂きましたことをご報告いたしますと共に本誌をお借りして御礼申し上げます。

ぬかだ・よしお

大正十年(二二)五月小田原に生まれる。農林省、会社役員、地域公民館長、現在小田原市ボランティアガイド協会員。

補遺 尾崎亮司 六 お濠埋立反対運動 ①

岡部 忠夫

- ・「小田原保勝会略記」碑に関連して
- ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ①～④
- (以上第一八四～八八号)
- ・お濠埋立反対運動① (以上本号)
- (次は次号以下に掲載予定)
- ・お濠埋立反対運動②
- ・北村透谷碑について
- ・むすび

銅門復元前には 小田原城内高校があった

いま、静かに銅門あがらぎを見ていると、昭和の初め頃、小田原町を揺るがせた猛烈なお濠埋立反対運動があったことや、そこに県立小田原高女が置かれたことが、嘘のようである。

また、戦後の教育改革で、昭和二十二年(二五七)四月、小田原高女に男女共学の定時制課程が置かれ、向学の志を抱いた勤労青少年が夜間通学したことも時代の波に沈もうとしている。無理もない。戦後といっても、既に半世紀前のことだ。

ところで、お濠埋立反対運動の立役者は尾崎亮司だが、さきに小田原高女の校舎・施設や学校と関連のある人について触れよう。昭和三十七年六月、学校は戦後私立報徳学園小田原第一高等学校があった現在地に

移ることになった。かつては閑院宮邸の一部であったところだ。移転で空き校舎になった建物は、小田原市役所となった。

新校舎の場所が城内でなくなったので、小田原城内高校の名称を変更しなくてはならないと云った話が職員室で取り交わされたことがある。昭和二十五年(二五〇)四月に校名が、県立小田原女子高等学校から県立小田原城内高等学校に改称されたばかりである。

全日制課程は従前通り女子生徒のみであったが、定時制課程に男子生徒がいるために校名が変わったのである。改称は二度目のことで、その経緯を知る教員のなかには大変なことに話すがいた。

しかし、知恵者がいた。小田原城は、かつて小田原北条氏時代に農家や町家を包含した大外郭の総構えであったことを考えれば、その必要はないとの意見で、校名変更は単なる茶飲み話に終わった。新校舎に移り終えたのは、第二期工事が完了した昭和三十七年(二六三)六月のことである。

城内高校をうまく騙し取った？ — 来賓鈴木十郎市長の挨拶 —

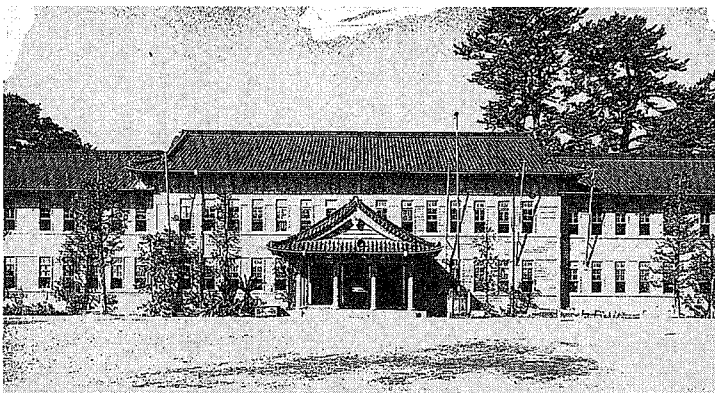
翌三十八年三月、第三期工事で体育館兼講堂が完成した。その月の定時制の卒業式だったか、小田原市長鈴木十郎は小田原地区高等学校定時制教育振興会々長として臨

席していた。

註 定時制振興会 城内高、同箱根分校、城東高(後に城北高創設と共に参加) 在学中の定時制生徒に物心両面からの援助の目的で昭和34年11月11日設立。事務局は城内高。小田原、足柄上下の市町村の助成金と生徒雇用主の賛助金で運営された。

その折、鈴木市長は挨拶の中で、「城内校の校舎をうまく騙しとった」と云った。笑いながらのことで、勿論、ユーモアのつもりであつたらう。職員・生徒のざわめきは聞こえなかつた。

鈴木市長の卒業式の挨拶は毎年同じことの繰り返しだが、「夕方になって、ふと眼を外にやると、城内高校の窓辺に明かりが灯っている。これから勉強する生徒たちが



小田原城内高校旧校舎
最後は一時的に市役所となる

いるのだと思うと、私は大いに励まされた」と生徒の心を揺さぶる言葉だった。舌禍を残すような市長ではない。見方によっては鈴木市長の面目躍如たるものがある。それにしても、「城内高校をうまく騙し取った」とは人食った話である。

鈴木十郎、日の丸を掲げ 小田原市長選に立候補

戦後の昭和二十二年(二五三)地方自治体が制定され、自治体首長の公選が初めて実施されたのは、二年後の昭和二十四年で、小田原市長選は二月十日に行われた。

「共産党に市長を渡せない」と、鈴木十郎は、日の丸を掲げて戦った。敗戦後、国旗の掲揚はGHQより禁止されていたが、この年の一月一日に解禁となったばかりである。それに、現在のように自動車を使ってスピードカーで連呼するわけではない。自転車を使って人出の賑やかな場所での選挙遊説であった。

保守共産の一騎打ちに、投票率は七一・四四%の好成績で、市民の関心の高さを示した。鈴木十郎は二二、二五四票、内野竹千代の六五〇〇票を、圧倒的に引き離した。彼が小田原市長になると、『週刊朝日』は、市長として小田原にはすぎた人物であると報じたことがある。これを読んだ市民の中には憤慨した者がいた。

『神奈川新聞』は、選挙結果の報道に、「鈴木氏の横顔」と題して「鈴木十郎氏(52)を知る人は口を揃えて円満温厚な人というが、信念にそむく事に対しては激昂して戦う一面を持っている。」と伝えている。この記事を書いた新聞記者は、鈴木十郎の人

柄をよく知った人であろう。

鈴木が、さる時ある酒席で気に食わないことをいった人と取っ組み合いの喧嘩をしたという伝説がある。

※

鈴木市長は、大正九年(二五〇)早稲田大学文学部英文科を中退、論文をださないうで卒業できず、自分の方から見切りをつけ読売新聞社に入社したと、書きのこしている。

当時は今ほど就職は厳しくなく、書いた文章を幾つか出して、それにパスすれば入社できたという。読売新聞社では演劇映画を担当。昭和三年、東京朝日新聞社に転社。同六年松竹戯歌舞伎座支配人となり、十一年同社大阪支社支配人に移っている。(『鈴木十郎 遺稿と追想』)

鈴木市長 市政に優れた力量を 發揮

鈴木市長は、行政には素人であったが、優れた手腕を見せ、まず手始めに県営事業として早川漁港の建設に着手し、続いて市制五十周年記念事業として子供に夢と希望を与えることをスローガンに「こども文化博覧会」を開催、荒廃した小田原城址公園を整備し、遊園地、動物園の開設に成功を収め、また矢継ぎ早に近隣町村を合併、県西における中心都市としての機能を確立した。さらには、全国都市にさきがけ国民健康保険事業をてがけた。また、公害の少ない企業の誘致では、先見の明があると今なお評価されている。競輪については、今となっては意見が分かれるが、市の財政に寄与したことが知られている。

そのほか小田原城、二宮尊徳記念館、市

民会館、星崎記念館、市立病院、久野霊園の創設、それに文化教育に力を注ぎ見るべきものがあつた。

このような輝やかしい業績に対して、戦後、今まで戦争目的のため取られていた経済統制が解かれ、それに総ての面が自由になった時代に出会った鈴木十郎に幸運があつたと云う見方がある。

たしかに、敗戦により自由が得られた。食糧難の時代も終わりを告げ、二十三年頃には、暗雲が漂う彼方にぼっかりあいた所に日の光が射しかけ、混濁の世から抜け出す気運にあつた。外で失ったものを内取り返さなければという気持ちが高じていた時世であつた。しかし、鈴木十郎が市長として、新しい施策を次々に生み出すには、その機会を活かす才知と経験が無ければ出来ないことだ。

「てんば(天馬)空をゆく」の譬えのように着想や手腕を發揮したのも、まさに彼の経歴と天性の資質によるものであろう。

そして、昭和三十二年二月の市長選挙に鈴木十郎に対抗馬なく無競争当選を果たし、昭和四十四年二月退任するまで五選二十年間市長の座にあつた。

鈴木市長が城内高校に招かれ、「校舎をうまく騙しとった」と云ったとき彼は四選目で、「向かう者敵なし」の状況にあり、おのずとワンマン市長となつていた。

ワンマン市長鈴木十郎の 孤独を癒した石井図書館長

秘書室では鈴木市長の顔色をうかがうようになる。市長の機嫌の悪いときは、石井図書館長に連絡して、市長の許に足を運ん

でもらった。

石井富之助図書館長と話をすると途端に
機嫌がよくなったと云う。

鈴木市長は文学部英文科、館長は専門部
政経科で専攻科目が違う。年齢も市長の方
が二回り上だ。同窓の誼とはいえない。

鈴木市長は、先に記したように映画演劇
の記者として年期をへて、それが縁で歌舞
伎座の支配人となっており、自然とその道
に詳しくなる。前々から映画演劇が好き

石井館長の一見素朴に見える洗練された軽
妙な語り口で、ずけずけ卒直にものをいう
のを、鈴木市長は直感的に石井さん(敬愛

をもつて「さん」付けて呼ばして頂く)の造詣
の深さを見抜いていたかもしれない。

それにしても、趣味が二人を結び付ける
ようになったとしても、本質的には、うま

が合ったのであろう。トップに立つ人は常
に孤独を伴うものだ。市長の孤独を癒す役

割を石井さんは担っていた訳だ。そこには、
二人の間に心安さが漂っていたのである。

昇給の日本記録

昭和三十四年、現在の城内にある星崎記

念館という図書館が完成してからのこと、
鈴木市長が来館した。そのときの市長と石

井さんの話のやりとりが『図書館一代』に
載っている。落語を読む感じで面白いので
そのまま掲げる。

「こない館の中で、好きな本を讀
んでいられるとは、あんたほどうい身

分の者はないね」といった。
市長とわたしは遠慮なく物をいい合

う仲であった。それにその時わたしは
少々虫の居どころが悪かったらしい。

「お陰様で、今は快適ですね。しかし
：」とわたしは図書館に入った時から

のことをながながとしゃべって、「だか
らわたしは絶対に破られない日本記録

保持者なんです。こんな記録を持って
いるということは、わたしがよっぽど

大ばかだったからなんです、もう少し利
口だったらこんな

ひでエところには
頼まれていなかっ

たでしょう。今だ
け見ている、いい

といつてもそりア
聞こえませんが、で

すよ。市長はすこ
しも怒らず、複雑

な表情をして聞い
てくれた。(：中

略)市長とわたし
は遠慮なく物をい

い合ったと思われる。

市長にしてみれば、立派な図書館をたて

てやったので、石井図書館長にお礼の言を
期待していたかも知れない。それを簡単に

済まされて、苦情を聞くはめになってし
まった。それに、市長はへ館長は好きな本

を讀んで孤独を味わうことがないだろう。
俺は孤独を味わっている」といった意識し

ない深層心理が働いていたのであろうか？
石井さんの日本記録保持者とは昇給ぶり

がすごく、それを指していた。それは、昭
和九年に図書館につとめたが、初任給が三

十九円で、十年に昇給して五十円に十二年
に五十五円、十三年には「当分五十八円給

与」であったという。
昭和二十一年二月二十一日付けで「公立

図書館長二任ズ、高等官七等ヲ以て待遇セ
ラル」と内閣辞令がでたという。おそらく

文化的国家を標榜するには、図書館長の格
上げが必要があったからであらう。石井さ

んの号俸は、一〇号俸とばして二四号俸の
千四百円で課長と同格になったという。

それにしても、『図書館一代』の「少々
虫の居どころが悪かったらしい」とは、た

ばかりがときに巧みな石井さんに心裡留保
があるように受け止められる。

石井さんは、図書館に勤め始めた頃。強
面であつたらしい。

次のようなことをいう人がいた。「大学を
出ているのに、図書館勤めとはわびしい感

じがした」「中学校がひけて、図書館に立
ち寄ると、石井さんは怖い顔をしていて傍
に寄りつけなかった。それが年を経るごと
に次第に立派な顔になっていった」と。

一句鑑賞

花冷えや買いて一丁絹豆腐

山口広子

さくらの時季の天候は変わりやすい。冬に戻ったよ
うな肌寒い日になることもある。そのような季節の譬
えを花冷とは実に雅びな言葉である。

夕餉の仕度に豆腐を買う主婦の姿が、春の夕暮れの
風景に解け合い、買ったばかりの豆腐のやわらかな肌
ざわり、いや舌ざわりが感じとれる。俳句のリズムを
心得た巧い生活句である。

(観持芳枝)

酒匂史談 ⑨

かわせ はやお
川瀬 速雄

十 海岸

南方にあり、海辺を袖ヶ浦と呼ぶ。

昭和三十年頃までは白砂青松、美しい海岸で、土手より波打際まで三十間程もあり、昭和十年頃には飛行機ショーや草競馬が行なわれていた。

◎ 大正五年(一九一六)二月二十日から、陸軍の第四期練習生の飛行訓練を所沢、小田原間で行なった。小田原の飛行場は酒匂川河口東側の海岸で、着陸場は僅か二百米に過ぎず、着陸には少なからず苦心を要し、良好な飛行場とは言えないが着陸には支障なかった。野外飛行四日目の二十三日に飛来してきた三機は、強風のため帰航を翌日に延期し、飛行機を杭に係留して警官や消防員に見張りを依頼しておいた。ところが、深夜突風に見舞われ、二機が近くの高級旅館松涛園の松の木に引

かかってしまった。酒匂小学校に、この時の飛行機のプロペラ(木製長さ約三米)を当時村の助役をしていた山崎忠治氏が寄贈し、理科室に展示してあったが、今はない。

◎ 大正八年(一九一九)八月十日、東京、大阪間の郵便飛行が計画された際には、緊急時の着陸地に指定されたこともあった。昭和十二年(一九三三)十一月には神奈川県連合中学校報国団の酒匂滑空機練習場として整備され、グライダーの練習を昭和十九年(一九四四)まで行なっていた。

◎ 『古記』に、「海岸に領主の松林あり、林中に御馬松と唱ふるあり。圍二尺許、昔八朔進献の馬、川支にて村民の家に繋ぎ置きしに、偶々仆れしを爰に埋む、其印の松なり」とあるが、松は今はなく、古老に聞いても知っていない者はいない。

私はこの松の場所を、南市場白山社の浜辺と考

察する。慶安二年(一六四五)九月、老中松平信綱が熱海に湯治の途中、酒匂図書(長吏小頭友右エ門)の所で休息をとった。この酒匂図書は、大永三年(二五三三)酒匂姓の名乗りをゆるされた長吏太郎右衛門の後裔と思われ、太郎右衛門の屋敷は、南市場白山社のあたりである。藩主の休息所と云へば、代官屋敷、名主宅、寺院、由緒ある者の屋敷で、この中から浜辺に近い屋敷といえは南市場の長吏屋敷となる。

十一 はんべと御所蹟

『新編相模国風土記稿』に、東海道の通街にて、西の方長一町餘の所をはんべと云ふ(字南川端)。はんべより北に入る横街を御所小路と呼ぶ(字北川端)、とある。

建保元年(三三三)正月、実朝が二所参詣の帰路、浜辺なる前の川瀬を行く水のはやくもけふの暮れにけるかな」という歌を詠んだことは前にも述べたが、『案ずるに浜辺の宿は酒匂村に在りしなり。今、

同村の小名をはんべと唱うるは其の遺名なり」と、はんべの由来が『金槐和歌集』についての解説書にある。

御所蹟

八幡の社前なり、潤三千坪、白田を開けり、北域に土手の形残り、高六尺、今は瓦屋舗と云、中古此所にて瓦を焼きしと云、土人云、源延尉義経の邸蹟なりと。

鎌倉幕府の将軍が上洛及び二所詣で、又幕府公用の者が酒匂宿の宿泊する館を、浜御所と呼んでいた。

浜御所の所在地だが、『風土記稿』に、八幡社前、潤三千坪、白田開、北域土手残形高六尺、瓦屋舗と云、とある。現在保険センターがあるあたりに八幡社があり、小道を隔てた川瀬倉庫の所に、保険センターが出来る迄七夕の松と称した松の大木があった。この川瀬倉庫の地は一段と高く、北側保険センターと、西側菊川に面した所は、六尺程の低地で掘割りの観があり、南面に字瓦屋敷がある。まさしく風土記に

示す通りの地形である。ただ瓦屋敷の辺は低地で、瓦を焼いたという物的証拠はない。もし瓦を焼いていたとするならば原料の土は何処から持ってきたのか。酒匂地区は堆積地帯でも瓦を焼く土など採取出来ないと思う。河原屋敷ではなからうか。

『吾妻鏡』によれば、治承四年(一一八四)より弘長三年(一一三三)の八十三年間に浜御所を使用したのは七回で、『吾妻鏡』に記載されない重臣などの使用を考えると、そう多くはなかったと思う。潤三千坪白田開け、という表現から見て、将軍の宿泊御殿も、大勢の家臣まで収容出来るような大きな立派なものではなく、随行の家来は板囲いか幕舎に泊まったのではなからうか。文永十一年(一一三三)日蓮上人一行が見延山に赴く途中、酒匂の川辺で日が暮れ宿泊に困っている時、はんべの地藏堂(法船寺)に一泊している。弘長三年から僅か十一年、もし河原屋敷があったのならなぜ泊まらなかった

のか、悪水掘から西河原屋敷の辺は低地なので、この間出水に依って流失消滅したのかも知れない。

十二 酒匂鍛冶分。

『新編相模国風土記稿』に、「酒匂鍛冶分、酒匂村より分れし地なり、元禄の改に初めて村名を載す。高縄に四十石餘にて、四域彼村に包まれ、民戸も錯雑して一村の如し、もと鍛冶工四十二軒餘住居せしかば地名となれり。今は民戸六十二軒の内、鍛冶工を業とする者纔に七戸のみなり。江戸の行程、領主検地等渾て酒匂村に異ならず。」とある。元禄の改とは徳川幕府の身分制度(士農工商)を指し、この時期職業別に統治者を定め、一定の地域に住まわせる制度で、小田原の大工町、青物町などその例である。酒匂に鍛冶工が何時から住み付いたか不明であるが、他国から地金になる材料を求めて集団で来村し、鍛冶の守護神金山社を祀り、農耕をしながら工房を造っていたものと思ふ。

その頭領は誰なのか不明であるが、折から元禄の大地震を契機にほぼ一定の地域に集められた。鉄滓の出土分布状況や、妙蓮寺の開基山崎氏の立派な墓のそばにある山崎氏一門の墓石の中に、酒匂鍛冶町住人山崎嘉兵衛尉、享保五庚子年(三〇)天

二月十九日、と刻銘のあるものがあることからして、この山崎氏の住居は現在の酒匂中学校の入口あたりで、国道を挟む一帯から妙蓮寺にかけてが酒匂鍛冶分であったようである。時代と共に統治制度も緩み、酒匂川や浜辺の砂鉄が原料の鍛冶では生活も成り立ち難く、一軒又一軒と廃業し、天保期にはわずか七軒、明治七年(二八)西本村に合併した。金山社は駒形社の東字免耕地に祀ってあったが明治の神仏令で酒匂神社に合祀された。

現在も呼ばれている家号、黒金屋、棒屋、鍵屋、名人鍛冶等は酒匂鍛冶の名残りである。

貞享二年(二六)御朱印高は、酒匂、一三四五石四斗一升一合。酒匂鍛冶

分。三十一石二斗九升八合。であった。

十三 水路

1 酒匂堰

大堰ともいう。中里より酒匂村の北を流れ小八幡に至る。十町十八間、巾五間、深さ三尺一尺五寸。

天正十八年(二五)八月、遠州二俣城から移封されて小田原城主となった大久保氏は、領国経営に農村の復興を重要事業にとりあげた。

当時の足柄地方は打続く戦乱によって農耕地は荒れ果てており、さらに大雨のたびに足柄平野は水びたしとなった。

大久保氏は酒匂川水系の整備、水路の確定を痛感した。特に酒匂川東側地域は灌漑用水に乏しく、どうしても酒匂川の水を足柄平野の東側の中央部に疏水しなければならなかった。又これによつて酒匂川西部の乱流を防止し村々を水害から救うことが出来ると考え、大久保氏の命運をかけての大工事に取り組んだ。

西大井の起点から国府津森戸川まで延長約十料。一部菊川を利用しての工事であった。

忠世から忠隣へと、文禄から慶長にかけて、酒匂川平野部の入口である大口に大堤防が築かれ、現在の酒匂川の川道が確定したといわれる。千代、蓮華寺には、大久保氏の重臣平野金太夫、大久保権右衛門の宿所が設けられ、ここで工事の総指揮がとられた。

これに続いて、西大井村を起点とする用水が、酒匂川の水を取り入れて平野部の東に流した後は、起点が金手村に移されて、三十数か村の水田をうるおすことになった。酒匂堰がそれである。

酒匂堰から取水する村々は、金手、西大井、上大井、下大井、東大友、西大友、永塚、千代、矢作、下堀、中里、別堀、高田、酒匂、小八幡、国府津、田島、曾我原、曾我岸、曾我谷津、曾我別所、上曾我。

酒匂川の治水と酒匂堰の開鑿は、足柄平野の新田開発をうながした。酒

匂川東側の下新田は鴨宮村内に開かれた新田であるが、慶長十六年(二二)三月、大久保氏の重臣天野金太夫、代官大浦采女は、同新田の名主長兵衛に対して、新田に入った牟(浪)人の諸役を免除し、屋敷を公認することを伝えていた。敗退した北條氏の遺臣と思われる牟人を新田に住住させ、積極的に領内の開発につとめているさまが伺える。こうして開発によつて次々と生まれた新田は、

中里、慶長(元和(二五)前(二五)三) 曾我、永禄年中(二五〇) 中里、天正(元和(二五)二) 中里、慶長(元和(二五)二) 下新田、慶長以前(二六) 上新田、万治二年以前(二五五) 飯泉新田、正保以前(二六四) 柳新田、万治元年以前(二六六) 清水新田、慶安二年(二六五) 穴部新田、慶安二年(二六五)

これ等の新田の中で、比較的成立の経緯の分かるのは中里村である。同村は酒匂の北部に開かれた新田村で、その初めは北條時代ともいわれている。しかし本格的に開発がすすめられたのは慶長年間(一五九六)であり、元和三年(一六二七)には検地をうけるまでに至っている。当時小田原藩はすでに城番時代に入っているが、新田が成立してから三年(五年を経て検地をうけるのがふつうであるから、その完成は大久保氏の頃と考えられる。開かれた田畑は四十六町五反歩余で、その内の九割が水田であった。その村高は五百九十石というから、新田開発としては当地方で最も規模の大きいものといえよう。

元和三年の検地當時は、土地持ちは百二人の多数にのぼるものの、このうち屋敷を有する農民はわずか七人にすぎず、他の屋敷を有しない農民九十五人の中には、一町歩以上の土地持ちが七人もいた。新田を開発したとはいえ、近くの村々からの開発参加者は、開いた土地を確保しながら、大部分は新田内に住まなかったと見られる。酒匂村の飛地が中里あるのもこの辺の事情であろう。寛永十八年(一六四一)万治二年(一六五五)とその後の二度の検地を経ると、屋敷持ちの数が三十人にふえ、全体としては農民の数が五十四人に減り、一村としての体裁が整えられていった。

○ 酒匂堰にまつわる挿話

● 小田原大海嘯

明治三十五年(一八九九)月二十八日、小田原海岸を直撃した未曾有の大海嘯は、小田原町、酒匂村、国府津村、などに甚大な被害をもたらした。被害状況は、

「小田原」総戸数(三四五〇戸)

全半壊二二三戸、流失二九三戸、浸水一〇〇〇戸、船舶の流失二隻、死者十一人、負傷者一八四人。

「酒匂」総戸数(約一〇〇〇戸)

全半壊二三三戸、流失一八七戸、浸水二〇七戸、船舶の流出三七隻、死者

三十三人、負傷者九四人。「国府津」総戸数(約四五〇戸)

全半壊三三三戸、流失三三三戸、浸水六八戸、船舶の流出三五隻、死者二一人、負傷者四九人。

ざっと小田原は四〇パーセント、酒匂は五〇パーセント、国府津は三〇パーセント程度の家屋に被害が出たことになる。

小田原国府津に比べ酒匂の死者が三倍も多いのは、小八幡の住民が八幡神社と三宝寺に避難したのだが、海水が酒匂堰を逆流し八幡神社の裏あたりで氾濫し国道を越えて海に流れた。この時八幡神社に避難した者は無事であったが、三宝寺に避難した者、二十数名が水死したという。古老の戒めに「非常の時は神社に逃げよ、神様が助けてくれる。寺に逃げるな、あの世の魂が迎えに来る」という言葉があるが、思うに寺に避難した人は墓石が倒れ自由を失い水死したのではなからうか。平素より非常の時の避難場所等は考え置くようにと、酒匂堰よりの教訓で

あろう。

● 小八幡の貉

昭和十六年(一九四一)酒匂堰の南岸に大蔵省印刷局小田原工場が建設され、篠竹や灌木雑草に覆われていた両岸の土手が改修されて見違えるようにサツパリした。しかしこの年の夏より小八幡西と酒匂東の大堰に近い民家に怪事が発生した。「○

○、起きろ、網を揚げる時刻だ」「××、雨が降って来た、干物をしまえ」起きて見ると誰も居ない。二度、三度と続くと又いたずらかと起きないでいると、兩戸や玄關に小石や砂を掛ける。春先から秋口にかけて四、五年も続いた、警察や消防団員が張り込みするとその日は出ない、実害はないが犯人不明。酒匂堰に住んでいた貉が巣穴を壊された腹いせの悪さだろうと貉のせいになってしまい、住民もあまり気にしなくなった。そのうち太平洋戦争から終戦の混乱にまぎれ、何時しか怪事は姿を消した。開発と自然保護への貉の警告か

も知れない。

○ 川西と川東の争い

● 正徳六年(一七二七)二月。酒匂村外二十七ヶ村が、酒匂堰上流の村々で横堰を作り取水しないようお願いした。

※噴火による降灰で天井川となった酒匂川は、大口土手が決潰し、西岸の足柄平野一帯に氾濫したため、東岸は流れが止まり、酒匂川より取水していた酒匂堰、鬼柳堰は完全に水無川となった。平野部の酒匂川東岸二八ヶ村は、大口土手付近の斑目村から取水したところ、旧川筋に至るまでの村々が横堰(水路をつくって取水する)したため、一口別に掘割を作り、二八ヶ村は従来通り取水することを願っている。(金井島瀬戸家文書より)

● 宝暦十二年(一七三二)四月。金手村と、西大井外二十ヶ村とが酒匂堰用水使用について争論を起こした。

先の正徳六年の酒匂堰より横堰を作り取水する紛争と同じような訴訟である。(つづく)

古城巡記

7



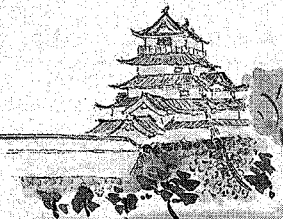
最終回



宇和島城

宇和島市(平山)中心の小山に建てられた平山城である。当初は城の外郭の約半分が海に接していたと云われている。
 慶長元年(一五九六年)藤堂高虎によって建てられた。現存する天守は寛文二年(一七六二年)伊達氏三代宗利によって大改修されたときに建て替えられたものである。石垣も単でおおわれ、美しい石塔式天守塔が一面の目玉となっている。

宇和島駅前や榑御掛の並木はいかゞ(菊目的)の高知より登りか、宇和島まで予て線路が二時向余の旅口石を舟風情があった。車はデセルで二輪、マシンカーで後乗り前降りバスと同じ。トイレは勿論なく、どろりとした電車に声かければ次で駅で用を足すことも出来る。でも取で、ここ線は四万十川に沿って走る。四万十川は海流が荒れ、かくれろ。丁度四月、天で、四万十川は、かき、何百匹、もう鯉の群りが眺められる。ここ地方は五月の前半は鯉が、何れでなく、大漁旗の様は大きな、何を何本も建てて、祝する。光景は、他のは、し、残り、り、今度、四万十川を離れ、今度、平水九年四月二十三日



鶴ヶ城

南鶴ヶ城と望むと、鳩わ、飯盛み、予は、昭和四年(一九二五年)に再建されたもので、大き、この城は、世に、鎌倉幕府、文政下におきたと、相模、合津守、元徳七年(一三八四年)である。

その後、平山、伊達政宗に滅ぼされ、秀吉の命により一年余り、この地を治め、あ、文禄三年(一五九五年)に本格的な七層の天守を築き、鶴ヶ城と改め、慶長十六年(一六二一年)、此地に大地震があり、天守は大きく傾き、その時、著生、加藤明成が現在、土層、天守を改築、この城は、平山城であり、築城、宇和島時代は、丸周囲、石垣を、芝土居であったが、現在、石垣が、後加、鉄門建設時に切り込ま、取り入れられた、こ、城を、八月、見、城郭、榑、辰、飯盛、明、平、年



編者註 松益は小栗良英氏の雅号である。

江戸時代初期田島に穴窟

風外慧薫禪師 三

野地 芳男

5 上曾我での穴居生活

上曾我生活については、先に田島山は寒く冬期は厳しい旨、記した。

しかし、他方考えるに田島洞窟より上曾我洞窟の方が、人里に近く、かつ曹洞宗系の末寺、竺土寺もあり何かと便利である故と高瀬氏は述べている。

風外禪師の真の心は、出来る限り世俗から離れたい：この心境からすれば、やはり、気候の条件が、日毎の生活に響いたと理解した方が無難な気がする。

ここは、田島より県道七二号を松田方面に行き、上曾我の停留所の右上、三島神社のすぐ下である。今は、中華店「四川」の上方面、約二〇〇mのところ、洞窟からは、富士山がよく眺められる位置にある。此処も、横穴古墳跡で、洞の広さは六畳間程度である。岩窟の奥に少し高くした三畳程の所もある。

ここには石碑がある。

当山開基 山寄進衆

風外道人御影 代田源内

腋立共仏八尊 稲毛新兵衛

二見仲兵衛 細田久工門

新太郎 父子熊沢新七

後世訟造立 交野七十之

当山開基

風外道人御影

二見仲兵衛

父子寄進之

寛永五年季戊辰 八月吉日

さらに、

開山御守

禪尼

淨蓮我清

同志 各靈位

相喜常円

禪門

風外禪師は、寛永五年に、この上曾我から真鶴に移住した。
*『新相模国風土記』には、寛

永五年より十一年に至るまで、凡そ七年の間風外という僧、籠居せし所というところがあるが、年号に誤りがあり、寛永五年に上曾我を去っている。

6 宮本武蔵と風外慧薫禪師

この両者との関連を調べて見ると、頗る共通点が見える。歴史に興味ある方々のご意見等も頂きたく、対比しながら種々記す事とする。

まず、宮本武蔵についてであるが、既に作家・吉川英治により、人物・名声は知られている。簡単に言えば、

劍豪・二天一流の祖であり、二天道楽・二刀流を編みだした。寛永二年(二空)に、熊本の雲巖寺に参籠し、兵法書(五輪書)を表した。正保二年(二空)六十二歳で生涯を閉じているが、高瀬氏資料によると、風外禪師は、承応三年(二空)頃、八十七歳で世を去つたとある。晩年は書・絵画・彫刻等気迫のこもった独特の水墨画を描いた。その代表作が「紙本墨画鵜図」青木文庫である。年代的にも、風外禪師が永禄十一年(二空)生まれ、遅れること十七年、天正十二年(二空)武蔵は、美作国(岡山県)吉野郡宮本村に生まれた。

風外禪師と宮本武蔵は同年代に生き、水墨画である書・画を残

している。

風外禪師の書・画については次に述べるとして、武蔵は芸術的な面、文才も相当あり、後に残している。特に、達磨頂相図などは風外達磨図と対比しても実にすばらしい。次に二人の生い立ち、思想、性格等、比べてみると類似点が多い。

風外禪師は幼くして母親に別れているが、武蔵も生母と三歳頃別れている、その後、母は播州の田住政久と再婚している。そして、二人に共通しているのは、両者の人生は不明の時期がけっこうある事である。両者は、相当の学問を身につけている。即ち芸術家として、若き時期に学び高齡にして、書画を出している。風外禪師五十五歳頃、武蔵も五十歳後半に多く描いている。また、人、権力者にたいして信用を置かなかつた。従って孤独であつたようだ。それに耐えた精神力は図抜けていたと思われる。しかも、安定を求めない姿もよく似ている点で、大変に興味深いものがある。生活面では、武蔵は風呂嫌い、美味しい食物も嫌い、寝るに布団は用いなかつたといわれ、実に風外上人と似ている点が多く、共通するものがある。要するに、江戸初期に生き、奇人で禅を学び、書画に素晴ら

しい足跡を残した点、実に共通した面があり、両者の資料を調べることが必要と思う。

7 松花堂昭乗と風外慧薫禪師

まず、松花堂昭乗しょうかどうしょうりやうについてである。書道史上優れた能書家で、「三筆」のひとり。すなわち寛永の三筆とは、近衛信尹のよねのぶ・本阿弥光悦・松花堂昭乗である。

風外上人の書画は、この松花堂昭乗に相当すると評価されている。

松花堂昭乗と言う人は、江戸初期(五四年〜三九年)の学僧・書画家であり、俗姓は中沼で名

は式部といい、大坂堺の生まれである。

書風は、滝本流という。水墨画や彩色画に長じ、和歌・茶道を嗜んだ。

現代に於いて、風外面僧が、此の松花堂昭乗に肩をならべ評価されている事は、風外書画が如何に優れているかの証と思われれる。

8 現代における風外墨画の評価

画僧としての風外慧薫上人は、その書画への技法と思想を、達磨画・布袋画・寒山拾得図お

よび漢詩書に見ることが出来る。

まず、その作品は、見事なまでに清澄な技法で画かれており、濁り、停滞がない。特に書線の伸び、達磨図、布袋図の線は素晴らしいと思える。寺山亘中氏(二松学舎大学教授・筆禅会師家)によると布袋図は、日本人の画いたものとしては最高峰と称している。また同氏は、風外面はどれをとっても単純明快な一筆書きであるが、よく観察すると、そこに限りない大きさと深さがあると述べている。

さらに、風外の書は、いづれも簡潔にして、堂々と伸び伸びした作品が多い。これには、真に信念に徹し、修練と教養を積んでいなければ書けない。この点、寺山教授は禅芸術の一級品と讃えている。

寒山拾得図



次に、達磨図の瞳である、先般の田島公民館での風外禪師の作品を見た人から、目が鋭い、薄気味悪い等の声も聞かれた。しかし更に優れた達磨図を見つめると、その澄んだ眸は深い人間の哀しみをにじませているのではないか、とも思われる。

特に、自照と称した自画像の達磨図には自己の目と眈まはりを入れ、さらには自らが達磨になり、延いては布袋、寒山拾得になり切ろうとしている様にも思えてならない。

これは、書画を常に自己の信念、思想をもって描き、世俗を離れてもいつも心は常に冴えて明るく、福というものが自分の中にあると信じ切っている様にも思える。

注目すべき事は、竹内氏(風外禪師研究家)は、「風外禪師は己れが生涯を布袋の中に封じて描き遣した」と述べているが、私達が現在鑑賞しても「なる程」と思える。

次に、「書」について見ると、書・画の基礎は、青木山長源寺(群馬県安中市上後閑)の師、為景清春であるのではと伝えられている。その後は、洞門、濟門といったものは無い。縁があれば、いづれの門にも参禅したようだ。

いづれにしても、後世にて風外面を見ると、各門を参歴し、厳しい信念で学問と修業に耐え、大悟した画・書が随所にみられると「名家略伝」は触れている。

中村原郷
の思い出

⑦ 遠藤治郎

川施餓鬼

平成九年、禪龍寺の本堂が落成して川東地区の建長寺派臨濟宗の九人の住職を始め大石工他多数の人々が出席されて盛大に行なわれた。

昭和三十五年以前の本堂建設に続いて二度目の改易の大役について。その間副総代の遠藤さんや幾人かの人が亡くなられて、さぞ心残りと思う。二カ年繰り上げて新築水屋、外溝工事も完成した。健康で建設の役に立てたことは感謝の気持ちで一杯である。昔養父に連れられて生御霊とかで曾我大沢の祖母の出の西大友に寄って帰途、小川の畦に三尺角程の白い布が女竹で張られてあつて竹の杓が置いてあつた。不思議に思い、養父に尋ねた。この小川で幼子が亡くなって供養のため、杓で川の水をかけてやった。

施餓鬼は三界萬靈を供養する行事。今は各家の供養のために、八月末頃行なわれる。

今日川施餓鬼を見る事もない六十数年前の思い出である。

註 生御霊 お盆に親族が実家に集まってもてなすしきたり。

工業団地開発

平成元年に小生が橘北連合自治会に、新県道建設計画を提出した。連合会長始め県土木事務所に請願書を提出して、平成二年頃新県道の路線が図面上完成発表された。偶々、中井地区で工業団地建設を行なっていた鹿島建設と間組協同体が当羽根尾、中村原、両地区の三十・五町歩の買収が始まった。当時は蜜柑減反が叫ばれていて小田原市の行政指導で進められた。小竹地区でも当初五十町歩程の計画が進んで

いた。

平成二年・三年頃は地価が一番の高値であつた。ある農家は数億円の土地代が入ったとか。パイパスの建設で橘北で十六戸、橘南で十四戸の反対運動が始まって、八カ年の月日が流れた。平成四年頃より日本の経済は下降線を辿り、平成不況と言われて、銀行や証券会社、生命保険会社、ホテル、デパート、中小工場の相次ぐ倒産。羽根尾工業団地の早期完成と工場誘致が望まれます。小生一時期この団地造成の理事をしていた。

ことわざ 諺

昔より「遠くの親戚より近くの他人」と言われている。昭和四十年二、三月十一月五日、長男の交通事故死。平成六年四月四日戦友から関東省延吉収容所の本を戴いたので御札に蜜柑を送るため中村原公民館入口の交差点で、ダンブが右折信号無視で猛進してくる。咄嗟の事、急ブレーキを踏んだが間に合わず、軽貨物車の前の部分が大破し

て、左足を挟まれた。車より脱出したが左足骨折で足が土に着けない。そこへ近所の人達が素早く駆け付けて、救急車を呼んでくれた。山近病院に迎う途中辺りが真っ暗になつて見えない。幸い頭の打ち傷もなく事なきを得て医者言葉に返事が出来た。普段、せいのかを子供の頃から祀つて行事に参加していたお陰かとも思った。こんな時に近所の人達が駆け付けて色々連絡を取つて下さつて感謝の念で涙が出た。諺と言言葉の意味を知らされた。

砂利採取

『小田原史談』に昭和三十六年頃酒匂川の砂利採取が禁止と書いてあるが、昭和四十一年の春頃より小生は家の塀を十七段まで石積みをした。當時は小型ミキサーで手練作業道路幅が六尺農道で農作業に迷惑にならないよう掘を板で塞いで砂利を置いて工事をする。近所の農家の若者が運賃稼ぎに農業の合間に運んでくれた。

その頃大木建材が酒匂川で砂利採取をしていて、そこから買いつけていると聞いた。その後間もなく大木建材が上町山に入つて三十余年が過ぎて五十町歩程の雑木山蜜柑山が平地と化した。近年、市の都市計画で三十町歩の土地が住宅地に変わると聞いている。その頃中井町地区に相鉄工業始め、数社が砂利を採つて中井地区でも百町歩程が平地となり、工場誘致も進んでいる様子である。曾我山は太古酒匂川が海中に押し出した砂利と思われ、塩分のない貴重な鉱物資源とかいう。

牛買い

昭和三十五年頃より専業化が進んで蜜柑農家が一・二頭の乳牛の搾乳を断念して売り出した。当時、藤沢の大牧場の近藤さんが買付けに来た。家畜商の下働きみたいにな案内しながら廻った。近藤さんは目利で牛の欠点を見抜く。牛の見方は六十箇所もあると言われ、一つ一つ教わつて後日、乳牛の導入に非常に役に

立った。その頃大牧場では一腹搾りといってお産後一年から二年搾乳して肉用牛に飼育して売出してお産の近い牛が買えた時代でした。数十頭以上で可能で都市酪農と言われ、粕類で飼養して高利益を上げていた。小生も二十頭位で真似したが、資金的に大変だった。入替えのために朝七時に家を出て房州に買付けに行く。昼頃館山に着いて、七・八頭見て二頭選んで金谷よりフェリーに乗船して夜八時頃は帰宅できた。昭和五十三年に基礎牛として有名な長野の茅野牧場より初娠牛を百萬円で買入れ、種付けして二十日で妊娠していると

見切り売り

中村原地方は、沖積土で土が重く玉葱の生産に適している。各農家は三反歩から一町歩も作付けした。玉葱の後作は、土が肥えていて生姜・落花生・瓜等多く収穫が出来た判別が多いので畑で分けて見切り売りをした。

また、仮小屋を建てて何反歩かを最盛期過ぎて見切り売りをした。買主は大手の肥料問屋の人が買付けに来て見切つて價を付け肥料代を差し引きして金を払った。子供の頃に遣り取りを見ていた。家によっては、草葦屋根の物置に仮の柱を立て稲を掛け、竹を一尺間隔に素縄で結び、玉葱を十玉位づつ藁で結び二つ結んで十段位にして、十月近く迄保存して売る。年によっては高價で売れたからである。戦後四日クラブが農業試験所の助けを受けて湘南極早生種を作り葉玉葱といって五本束を十束一束に結び、横浜・東京市場に出荷して高價に売れた。早や五十年昔の話。

生姜の事件

昭和三十年、生姜が非常な高價で、翌三十一年に各農家が借入金迄して、畠を何反歩も借地して投資した。その年は、天候にも恵まれて、肥料も多めに使用したためか人の胸迄葉が成育した。生姜は、幾種類もある。

昔よりのものを地生姜といって根が細い。三州生姜は筆生姜として市場にも人気があった。中太生姜は漬物用。大太生姜は鬼生姜と言われていた。前年、高價で売れた農家によつては、百萬円以上も投資して、秋の収穫期になつて大きく價が下がつて当時の價で一貫目(四匁)当り五十匁迄下落した。漬物屋がつけこんで日迄で指定して以後は買入ないといふので、人出を増して収穫に追われた。畠の借地料、肥料代、種代、人件費等で大きな損金が出て畠を何反か売つて返済したとか。この年は全国的に作付けを増した関係と漬物屋がそれを見込んで漬物の製品の價下がり配慮してか、小生の思ひ出に残る事件と思う。

こたわら 諺 (2)

平成四年の初め頃、中村原公民館の東隣にアパートが建設されると聞き、農協不動産部に問い合わせした。小澤さんが建築の申込みにより設計も進んでいる様子。小生

は昭和五十七年度の自治会長の折り公民館の東側の通路拡幅の陳情書を提出してそのままである。急ぎ公図を取つて見たら外の土地三百坪が売却され分筆されている。小澤さんに聞いてみると、ヤオマサ不動産に売却したと。

道路計画でみるとくこの字になつてしまふ。ヤオマサ不動産に電話したら社長の田嶋昇さんが見えた。農協不動産部と小澤さんと話し合つて入口部分で六メートルを確保して将来に備えた。その折、ヤオマサの社長さんにごこれの土地があるとお話しした。

その土地は、中村原字金山にあり、珍しく道路が五本も集中している。セブイレブンを誘致の話が進んで、四月には着工となつた。当初他の人にお話ししたら、こんな田舎に来ないと笑われた。「情けは人のためならず」道路の件で思った。

下原の産業

中村原は戸数の割に産業が盛んな地である。

水車が九軒。峰尾漬物店。峰屋下駄店。井上鍛冶屋。中屋茶屋。青木茶屋。当り屋茶屋。久保寺酒店。地獄屋茶屋。関山荷馬車業。岡本落花生仲買商。内藤肥料店。多田豚仲買商。石塚米煙草商。金子新仲買商。遠藤青果商。江戸屋薬商。吉野煙草商。小生の雜貨商。飯田屋根葦業。田代染屋。建具屋は下原中心に記す。小林材木商。曲淵ブリキ屋。多田醤油製造所。金藪茶屋。加藤醤油絞り業。仲込肥料骨粉製造所。等

考えてみると押切の浜に三千石船が着いた故か製造して江戸当りに運んだと思われる。戸口の業種の話題だけでも色々書ききれない程である。近年は昭和三十五年にエース光学。四十一年には丸イ食品が中村原に進出と来て大きく様変わりして戸数の増加は三十年間の間に一戸建の住宅建設が進み、最近では工業団地造成工事が急ピッチに進み、下水道、上水道の四百棟の増設、河川改修等で目まぐるしい。

露国・日露の役俘虜のこと(17)

八十七年ぶりのお礼 後編(16)

内田善作記
吉田雪子編 「日露戦役従軍記録書簡往来」

九 露国メジムエージ出発

から神戸帰着まで

メジムエージ出発

十二月十二日午前六時整列。患者及び障害者百二十名、ウートリコシ停車場に向けて当メジムエージを出発す。

十二月十三日ウートリコシ停車場に十二時に着す。この日は降雨にて非常に困難す。昼食後一時五十分停車場を出発。露国鉄道は路線低きところにある時は両側に雪集めを建て雪を線路に吹き入らざる様に注意せしなり。

十二月十五日午前六時二十分ウイシナ停車場着。非常に広大にして地中に道路を開通して乗り換え客の往来に便にせり。その地中の構造は実に壮麗なるものなり。

十二月十五日正午コブノー停車場に着。同日午後五時ドイツと露国との国境なるウエルジボ

故・隠岐威重

ロウオー停車場に着す。直ちにプラットホーム整列の上、人員検査を終りドイツ鉄道に乗ず。時に六時五十八分なり。但し露国とドイツとは時間に一時間の相違があるという。三十分間停車して出発して愈々ドイツ国有なる停車場に着す。プラットホームは人を以て山を築きたり。汽車が出発するに及び老幼婦女子に至るまで我に同情を以てハンカチーフを以て別れを告げたり。

十二月十六日ドイツ駐車場に於いて十一時頃朝食せり。食事終わりに及びパン並びに林檎を袋に入れて与えられたり。又巻き煙草二十本を各兵に与えられたり。その接待員は篤志看護婦会より、又赤十字社員等なりき。決別に及びハンカチーフを以て同情を表わせられたり。実にドイツは同情心厚きを感じたり。途中において学校生徒の歓迎する者多数なりき。

十二月十六日午後四時頃ベルリン停車場に着す。此処にて夕食をなす。別に食堂は無き故停車場の構内に机を設け且つ椅子を設け各々食器を受け取りて食事せり。スープ、パン、並びにビール等なりき。食事の後、前日本陸軍大学の教授たりしメツテル夫人が一同を見舞われ葉巻き煙草二本を恵まれたり。続いて赤十字社より、菓子、巻き煙草併せて林檎二箱、絵はがき、上等パン但し袋入りなり。凡そ停車一時間ばかりで発車す。漸くにして午後十一時、ドイツで有名なハンブルグ停車場に着す。

ハンブルグ到着

深夜と雖も歓迎する者山を築く。直ちに下車して乗船すると雖も、客船一隻の為総員の宿営する混雑を極めたり。十二月十七日他一隻の客船来たらず。そのため混雑を極め三度の食事も二度位にて誠に不自由を覚えた。赤十字社よりビールを寄贈せられたるに付、正午頃より夜に至る迄各兵卒に飲ませたり。又在ドイツ日本人の発起に依る慰問品を抽選にて各兵に分配せられたり。寄贈金(マルク)を分配せられたり。十二月十八日、船中に滞在せしのみ。十二月十九日朝一隻の客船来たりしに

付、第一師団、第三師団、第四、第九、第十師団の各兵卒、並びにその部隊に属する将校は愈々午後二時頃乗組みを終わらり。

註乗船人数は記されず不明だが日本軍の捕虜になった総数は二千名弱を念頭に置こう

其の夜、インド洋は炎熱の爲着用すべき夏服、帽子を支給せられたり。十二月二十日夜足が不自由ながらも市中を往來せし処、老幼婦女子に至るまで、我が日本軍人に同情を表し、煙草、甘味等を贈り又葉書等に氏名を書き呉れという人多く、実に往來するに五月蝿い位なりき。

十二月二十一日ドイツ人の有志者にて日本捕虜障害者のためハンブルグを見物させたり。正午頃汽船より上陸をなし、それより馬車にて市中を往來せり。夕刻に至り帰船す。但し、馬車十九両を連ね実に内地にては、到底乗る事を得ざる馬車なり。恰も衆議院議員の議会に参集する状に似たり。十二月二十一日夜、汽船にて芝居見物をせり。実に芝居小屋の構造は到底内地の歌舞伎座等は及ばざると思いたり。西洋にては女方は女の勤め、男方は男の勤むるものにて情愛の具合等は実に見る者をして感ぜしむるなり。狂言を観客が拍手する時はしめ幕になりて

も又幕を引き上げ幾回も俳優が見物人に御礼に出て来るなり。

ハンブルグ出帆

十二月二十二日午前十一時癒々我々乗船は出帆したり。見送る者多く、婦人はハンカチーフを以て振り、男子は帽子を脱して敬礼をする。

ドイツに在留せらるる日本人、及び大井大佐殿も見送りに出張せられたり。その船体の岸を去るに及び覺えず落涙せり。十二月二十三日兵卒に手当て料一日三十錢宛四十五日分即ち英金にて十三円五十錢を給せられたり。十二月二十四日午後十一時頃波濤高きビスケー湾を航海せり。幸いに波静かと雖も普通の海上よりは非常に異なり一人として船に酔わざる者なく食事もせず臥床せり。

二十八日に至り漸く波静かになりたるを以て皆頭をあげて食事をする様になりたり。二十九日に至り波平穩にしてアフリカ大陸を見る様に至りたり。二十五日ドイツ人の寄贈せる霜降りシャツ二枚を各兵卒に給せられたり。十二月二十九日ジブラルタル海峡に入る。兩岸の距離十一哩と言う。右に見えるはアフリカのモロッコと言う処にてアールミーナ砲台あり。左に見えるのは英領ジブラルタル砲台な

り。気候は十二月頃と雖も、海上にて内地の四、五月の気候なり。甲板に出ずれば実に良き気候なり。十二月三十日晴天、海上穏やかにして、空氣誠に良く、非常に愉快を覺えアフリカ大陸を認む。

同日夕刻アルゼリヤ港に入港す。この地はフランス第十九軍団の所在地なり。フランス人のアフリカ土人を雇いて小舟を漕がし、蜜柑その他煙草等を本船に売り込み来たり。軍人の服装は、羅紗の袴(ズボン)を穿き上衣は日本の騎兵と大差なし。

帽子は赤き頭巾を戴けり。又憲兵帽子の様なる物を戴き日本の将官の如き袴を穿けり。土民は椀型の帽子を冠り手拭の如きものをその上に巻き衣服は清国人の如きものを着せり。髪の毛等は概ね黒し。体の色も亦従つて黒し。婦人も大差なし。フランスよりの移住民は皆、露国語を解せり。十一月と雖も大抵夏服、夏帽子等を用い居たり。市は全町、山の中腹に位置せり。故に道路の下は皆倉庫なり。電車並びに鉄道の設け在り。然れども土地の風習として売買等には非常に悪習あり。道路は一般に敷石を敷き詰め、中央は馬車並びに電車を通わしめ、両側は人の往来せり。これに加えて軒端長き故、雨天と雖も往来する人の

雨にかかる等の患いなし。三十一日午後七時頃、アルゼリヤ港を出帆す。当港に移住せるフランス人の同情を表す意少しもなし。明治三十九年元旦は曇天にして右側にアフリカ大陸を見るのみ。昼食に大根の三杯酢、大根、人参、煮物、生魚の三杯酢、味付け飯、並びにビール二人に付一本宛、度々に給せられたり。但しビールは英国郵船会社の我々軍人に寄贈せしものなりと。

一月六日午前十時頃英領ポトサイドに入港す。港は意外に广大ではなく、海水の深さは開削せしを以て誠に以て浅し。港内は時々舟で港の泥を汲み上げ居れり。

ポトサイド港出帆

一月七日午後四時当港を出帆し、たちまちにスエズ運河に入る。兩大陸皆砂漠の如く平野にて草木は見えずと雖もアフリカ大陸の方に、運河に沿いて小さな檜の様なる木あり。運河の幅は凡そ三、四十間位なり。始め当汽船のポトサイドを出帆するや、同盟国なる英軍艦の停泊するあり。その前面を通過するや、英艦の将校並びに乗組員は皆甲板に出て敬意を表したり。我が汽船よりも答礼を行ない別れを告げたり。同盟たる情を感じたり。

大スエズ運河の長さは八十七哩。翌一月八日午後三時頃スエズ運河を通過す。その沿岸にスエズという小さな町あり。それより紅海に出ず。その運河を航行するに探照灯を船頭に点じ夜中汽船の衝突せざる様にせり。速力は極遅くして欧州からの船舶は東洋からの船舶に対して、当時アフリカの岸に沿って待ち居るなり。その探照灯料は、運河を通過する料金は非常に高価なるものと言う。

運河の岸には俗に黒奴と言う人類ありて船客より物品を貰うを業とせり。船客の運河に物品を投ずる時は直ちに水中に泳ぎ入りて物品を拾うなり。その首領らしき者は部下を指揮する如く見えたり。体格極めて細く足と手は極めて長く、衣服は白き衣を着し居り、その黒き事は言うばかりなし。

一月九日紅海を通過するに当たりて兩大陸を少しづつ所々見たり。然れども十日・十一日に至りては更に見ることなし。気候は一月九日頃より急に暑くなり内地の土用の如し。一月十二日午前七時頃、アラビヤ大陸の方に一小島を見たり。尚前進するに従い、五、六島を見たり。一月十五日正午アフリカの突出せる処の一孤島を見たり。

コロナボ港に停泊

一月二十一日は午後四時頃コロナボ港(スリランカ)に停泊す。港の入り口には波大きに對して石を以て波除を構築せり。港内にはドイツ船と英國船並びに彼の露国ウラジオストック艦隊なるクロナボエ・ロシヤ外に一隻停泊するを認める。陸には椰子の木の繁殖するを見る。また人力車等を使用せり。露国軍艦は金州丸を打撃せし軍艦なりと言ふ。一月二十一日夜急に天候変じ頻りに雷鳴す。將に落雷せんとする有様にて降雨あり。翌二十二日將校の引率にて上陸を許さる。英國にて我々の為、且つ日曜日と見え黒奴を以て狂言をなさしむ。その踊り等は手品、馬鹿踊

り、外二、三種ありたり。來客に蜜柑、酒、ビール、芭蕉の実(バナナ?)等を馳走せり。又釈迦如來の墓に參拜せり。午後五時半歸船す。土地の黒奴は多く男女を問わず、髪は同様、衣服は男は洋服の上着のみ着し、腰巻きの様な物を纏いたり。女はシャツの様な物を着し腰には男と同様。極下等至れば、腰巻さだけで体は何も着せず手拭の様な物を頸に巻き付け居たり。一般に男女を問わず束髪の如し。然れども男も少しく宜しき人物は内地の輪櫛の如きを頭の上に載せておれり。極裕福家に至れば男女を問わず欧州人の如く開化の衣服を着し帽子を冠せり。黒奴は腕輪、並びに足輪等を用う。市は然程廣大には非ずと雖も汽車、電車

の設けあり。僧侶等は黄色の衣を着し、団扇の如き物を持ち裸足にて居れり。釈迦如來堂には日本僧侶の若干渡來し居る者あると言ふ。当船に人來たりて説教をなさんと、その一人は埼玉県人にて真言宗の僧侶なりと言ふ。一月二十三日午後四時コロナボを出帆す。二十六日午後九時頃より機関の故障の為、進行を停止す。翌二十七日に至りて午前九時頃漸く進行を開始す。同日夕刻に至りマライ半島並びにスマトラ付近に在る小島を眼前に見つつ進行せり。その右側なる小島には灯台在りて信号せり。一月二十九日各所に小島を見つつ進行せり。(つづく)

新刊紹介

◇人生、ゆうゆう

編集 A判変形 二六六頁
小田原市立第三中学
三回生同期会

発行 二〇〇一年一月
内容 二中(現・白鷗中学)の
三回生たちが新制中学発
足五十周年を記念して刊

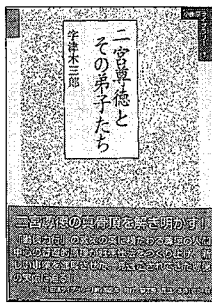


行した『昭和二十二年新制中学一年生・白鷗中学の旅立ち』に触発されて発行したという。

旧制中学校・女学校生徒が、戦時中勤労働員をされその特殊な体験を記した文集は発行されているが、新制中学では、筆者の知るかぎりでは神奈川県下では小田原市立二中が嚆矢で、小田原市立三中がそれに次ぐ。全国的にみても新制中学校卒業生が在校当時の思い出を綴った例は少ないと思われる。ただ三中の文集は、装

お知らせ
原稿はアオキ画廊が編集委員、または役員(本部及び地区の)にお送りください。また、よい資料があるとか、貴重な体験をお持ちの方で、文を書いたことがなく苦手だといわれる向きは、お知らせください。ご連絡いただければ、当方で伺います。

丁・編集がスマートすぎて損をしている。しかし、内容は二中の発行したものと同様、戦後生活に困難な時代を頑張って乗り切った、逞しい内容のものが見られ貴重な資料となっている。小田原ライブラリー3
◇二宮尊徳とその弟子たち
企画・編集 小田原ライブラリー



の思想を哲学としてきたのは、明治後半あたりからでいたづらに難解にしているが、本書では、人間中心にした考え方が報徳仕法をつくり上げたと分かりやすく説明している。後半では富田高慶や福住正兄、それに遠州(静

岡県西部)で報徳運動を展開した福山滝助らについてふれている。



小田原ライブラリー4
◆小田原空襲

頒価 一一八円
B6判 一一〇〇円

著者 井上 弘

筆者は「戦時下の小田原地方を記録する会」会員として20年余り、地域の戦争体験を掘り起こし

小田原史談会行事

◎第四回 史跡めぐり

報告

◆足助・明智・岩村方面へ

【日時】

十一月八日(木)～九日(金)

【行程】

八日(木) 小田原駅前六時三十分⇨東名⇨足助(香嵐溪香積寺昼食 足助八幡宮中馬館他をまわる)

てきただけに、今次の戦争の地域被害の実態を訴えている。

『小田原空襲』のタイトルは、八月十五日の万年町(現・浜町)の空襲に至までの道程を記しており、記録は山北町、湯河原町、真鶴町の区域までに及び、コンパクトに纏められた好著である。

◆小田原市史 別編「自然」

頒価 四六八円
B5判 四〇〇〇円

編集・発行 小田原市

内容

「地形・地質」「気象」「植物」「動物」「海の動物」の五編からなり、各分野の専門家十七人が執筆している。

⇨茶臼山温泉塩吹館泊

九日(金) 旅館⇨明智町(大正村役場 大正ロマン館他をまわる)⇨昼食

⇨岩村町(歴史資料館伝統的建造物保存地区他まわる)⇨小田原駅前

【会費】二万五千元
【参加者】二十一名

(名前略)

◆初詣 東京方面へ

【日時】一月十九日(土)

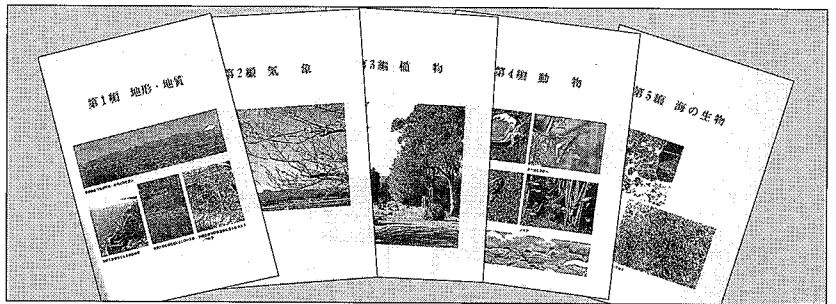
【行程】小田原駅前七時出発⇨厚木道路⇨東名⇨

⇨神田明神⇨湯島聖堂⇨隣祥院湯島天神⇨靖国神社(昼食)⇨皇居東御苑⇨

⇨将門首塚⇨小田原

【会費】五千元
【参加者】四十九名

(名前略)



地形・地質は最新のデータを基に、気象は30年間の長期観測による報告を、動植物は小田原で見られるものを貴重な写真・図版を用いて紹介。しかもオールカラーで県内では初めての試みである。市内各書店などで販売しているが、郵送希望をされる方は、下記まで送料五二〇円と合わせ現金書留で送金されるとよい。

〒二五〇一〇〇四五

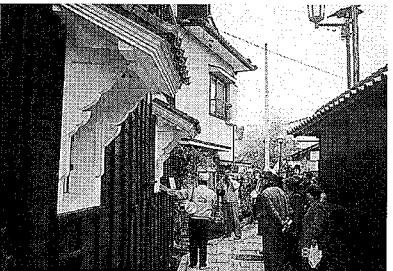
小田原市城山4-2-11

小田原市教育委員会図書館

市史編さん担当

文芸誌目次紹介

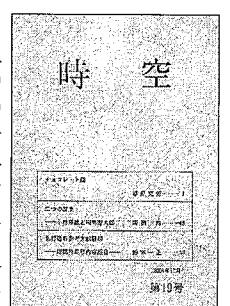
◆時空 第19号



明智町 大正村散歩



岩村町歴史資料館前



二〇〇一年十二月発行

頒価 五〇〇円

発行所 時空の会

発行人 鈴木一正

〒二三六-〇〇一六

横浜市金沢区谷津町六五

一-1011 鈴木一正

・チョコレート館

草原 克芳

・二つの歴史

小林秀雄と

司馬遼太郎

菊田 均

・北村透谷参考文献目録

雑誌特集号内容細目

鈴木 一正

(澄)

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

飛多魚屋

紳士服の アメリカヤ

(株) アルファ

伝統工芸 石川漆器(株)

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

伊豆箱根トラベル 小田原営業所

画材 ガクブチ ヲウエ

自動車修理 板金塗装 I-3マン

かまぼこ

小田原ガス

小田原市農業協同組合

小田原報徳自動車

株式会社 オートセンター・スギヤマ

オリオン座

かまぼこ 籠 清

JA 神奈川信用

カネボウ株式会社小田原工場

神尾食品工業

木地挽 日下部産業

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

小国府津館

(有)小松石材店

さがみ信用金庫

趣味のこぶく さくらい

箱根湯本温泉 箱のお宿 正華堂 春光荘

小田原 小田原 ちんまろ

辰寿堂スポーツ

大営不動産

高木整形外科医院

和元直営 小田原城趾前 田毎

紋る海

スビスニ宮

茶半家具株式会社

ちんまろ本店

角田ガクブチ店

東京電力(株)小田原営業所

トーホー建物齏

鳥かつ樓

和菓子 菜の花

八小堂書店

八子マサ

平井書店

(株) 古屋花店

株式会社 報徳

建築金物 家庭金物 (株) 星崎仲吉商店

本多時計店

松坂屋

学生専科 マルク

諸星運輸グループ

曾我の梅子 塩辛・かまぼこ 美の政

みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社

防災器具 優光社

総会のお知らせ

日時 4月27日(土) 午後1時30分
会場 小田原市立図書館
平成13年度事業・決算報告
平成14年度事業計画案
同 予算案 その他
講演 ①小田原北条氏の伝えたもの
②「明治小田原太平記」を読んで
講師 石井啓文氏
(本会会員・小田原市民教授)
多数の方の参加をお待ちしております。

平成14年度史跡めぐり(案)

5月15日(水) ~久野方面を歩こう~
集合場所 五百羅漢駅前 9時
主な見学場所 玉宝寺、久野古墳群、
総世寺、東泉院、幻庵
屋敷跡、京福寺他
講師 高橋佐年副会長
昼食持参、歩きやすい服装で参加
しましょう。

6月11日(火) ~平塚、茅ヶ崎、藤沢方
面へ~
集合場所 小田原駅前(東口)
7時50分
主な見学場所 平塚八幡宮、市立博物館、
旧相模川橋脚、浄見寺、
大庭城址、遊行寺
会費 4,000円(昼食代含む)
受付 6月4日(火) 9時
伊豆箱根トラベル小田原営業所
(工事中のため場所がいつもの
所と違っていただきますのでご注意く
ださい。美ゆ紀ビルと新光証券
の間を入り左手二階です。)

9月21日(土) ~埼玉方面へ~
さきたま風土記の丘、忍城址他
11月7日(木)~8日(金)
~中山道宿場めぐり(木曾路を中心に)~
平成15年2月8日(土) 初詣
高麗神社、越生梅林他

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千円